

企画展 補陀洛東門開く 蹉跎山金剛福寺によせて

会期：令和2年4月24日(金)～6月28日(日)

岡本 桂典

足摺岬

蹉跎山金剛福寺は、四国の最南端、足摺岬を見下ろす丘陵中腹にあります。

足摺岬は、足摺半島の最南端に位置し、蹉跎岬や足摺岬と呼称されていましたが、足摺岬の名称が全国的に知られるようになり、昭和40年(1965)に土佐清水市議会において、足摺岬と称することが決まりました。

足摺半島の地形は、山地と海岸段丘に特徴があります。山地の緑のある地域に海岸段丘が発達し、この段丘が直



足摺岬 先端の白くみえる灯台と断崖の花崗岩

接海に接しています。花崗岩の隆起海岸で、海岸段丘の段が広く発達しており、ここに椿やウバメガシ、タブノキ等の常緑照葉樹がみられます。また、ビロウなどの亜熱帯の植物も分布し、岬からクジラが見えることもあります。岬は、絶壁となり太平洋に落ち込み、海食洞窟をつくりだしています。断崖には地衣類以外の植物はみられず、厳しい自然環境と眺望の美しさをみせています。この自然条件が、当地を霊場化した一つの要因と考えられます。

そのことを示す資料として、金剛福寺には、有名な『蹉跎山縁起』が伝世されています。享禄5年(1532)に土佐に下向した住持尊海の手によるもので、一条房家の要請をうけて書かれたものです。それには、金剛福寺の景観について次のように記されています。「過去遠々仏跡、菩薩説法の浄場なり、仰て地形の勝絶を見るに、後は、大悲の山峨々とそびへ」と書かれています。さらに、当地は補陀洛山との境として位置づけられています。

現在、四国の南西部、高知県の足摺岬から愛媛県の宇和海沿岸に至る地域

の11,345haが、足摺宇和海国立公園となっています。

蹉跎山補陀洛院金剛福寺

金剛福寺は、蹉跎山補陀洛院金剛福寺と号し、真言宗寺院で四国霊場八十八ヶ所第三十八番札所です。寺の開創については明らかではありませんが、寺伝によると、弘法大師空海が眼前に広がる大海原に観世音菩薩の理想の聖地、補陀洛の世界を感じたときとされています。ときの嵯峨天皇(在位809～823)に奏上、勅願により伽藍を建立し、勅額「補陀洛東門」を受け、開創したと伝えられる古刹です。



本堂内の「補陀洛東門」扁額

『蹉跎山縁起』にも空海が開創し、鎮守として熊野三所権現、愛満、宝満、白皇、白山を勧請したと伝えています。

金剛福寺の本尊は、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字浜の宮にある補陀洛

山寺と同じ三面千手観音立像です。金剛福寺のご詠歌には、「ふだらくやこはみさきの船の棹とるもすつるも法の蹉跎山」とあります。



金剛福寺本堂の観音菩薩に参詣するお遍路さん

山号の蹉跎山の蹉跎は足摺りと同義語です。蹉跎とは、つまりき進めないとか、機会を失うという意味です。『蹉跎山縁起』には、かつて金峯上人が住職の時、天魔が常に修行の邪魔をするので、上人が一指を上げ降伏させると、諸魔は嘆き悲しんで蹉跎したというのです。そこで、山号を月輪山から蹉跎山に改めたという伝承があります。この蹉跎岬の名称は、応保元年(1161)の「土佐国幡多郡収納所宛行状寫」に「蹉跎御崎千手観音経供田」とみえています。嘉応元年(1169)「土佐国金剛福寺僧弘睿解」には、「蹉跎山金剛福寺」とみえおり、

嵯峨天皇から三昧供と修理料が施入されています。平安時代後期には、すでに観音信仰の霊場として信仰を集めていたと考えられます。

金剛福寺は、平安時代から鎌倉時代にかけて摂関家藤原氏の外護を受けていました。しかし、平安時代末には、寺領や伽藍の維持管理に苦心していたと思われまます。鎌倉時代初期には、九条家幡多荘が成立し、後に一条家領となり、一条家の保護を受けて幡多荘内に所領を安堵されています。

金剛福寺は建長8年(1256)、正応2年(1289)、延慶3年(1310)の三度の回祿(火災)に遭い伽藍や仏像等を焼失していますがその度に修造されています。

中世の寺院では、人々に作善業を進め、勧進活動が行われていました。三度の回祿の後、金剛福寺も勧進活動により再建されたと思われまます。

■本尊千手観音立像及脇侍立像と二十八部衆立像
平成16～18年に本尊の木造千手観音立像の解体修理が行われました。この修理の過程で仏像の胎内からは、「暦應五壬／午歳」の墨書銘や血書の妙法蓮華経8巻、毛髪を包み込んだ紙など、多くの納入品が発見されました。これらの胎内納入品や銘文から、千手観音立像が造像されたのは、暦応5年(1342)のころと考えられます。な



木造千手観音立像
胎内銘 暦応5年(1342)

お、本尊は秘仏のため今回の企画展では展示されません。

平成30～31年度には、本尊両脇侍の木造不動明王立像、木造毘沙門天立像の修理が行われました。解体修理の時に両脇侍の頭部前面裏から「暦應五壬／午歳／五月八日」の銘が見つかって



木造不動明王立像

います。この脇侍も暦応5年ころに畿内で造像されたものと思われまます。両像は、修理後初めて公開します。平成26～28年度には、木造二十八部衆立像と風神・雷神像の解体修理が行われました。二十八部衆は、観音の眷属で、観音と經典を信仰するものを護持するとされています。二十八部衆のうちの木造毘沙門天立像からは、「暦應五年」の墨書銘や納入品の紙片が3片見つかっています。

この本尊千手観音立像等の胎内銘や納入品から結縁した人々の祈りが見て取れます。本尊落慶供養には、金剛福寺住職をはじめ、一条経通や藤原氏や源氏の僧俗15名が結縁し、修造造仏には、修験者や遊行聖など勧進聖の姿もあつたと思われまます。そこに金剛福寺の観音信仰の広がり、中世の人々の神仏世界への眼差しを垣間みることができます。



金剛福寺二十八部衆立像の一部(展示公開されまます。)

■観音浄土をめざす 補陀落渡海

補陀洛は、サンスクリット語の「ポタラカ(Potalaka)」の音写で、南インドにあると伝説的に信じられている観音菩薩の霊地のこと。平安時代以降、日本人はその霊地は観音菩薩の住む浄土で、南の海上に補陀洛山が存在すると思っていました。多くの日本人が補陀洛山を信じて小船でめざしま

した。いわゆる捨身行であるのですが、自殺行為でした。足摺岬も補陀洛信仰の霊場として知られていました。

このような補陀洛渡海を描いた絵画に霊場(寺社)へ参詣者を勧誘する目的で制作された社寺参詣曼荼羅の一つ、『那智参詣曼荼羅』があります。この曼荼羅は、熊野信仰の聖地である熊野那智山を描いたもので、補陀洛渡海、那智瀧、年中行事、那智社社殿など那智山をめぐる宗教的なものとその聖地を巡る様々な人物たちが描かれています。

足摺岬からどのような船で渡海したかはわかりません。先の『那智参詣曼荼羅』には補陀洛渡海船が描かれています。この曼荼羅に描かれた渡海船を参考に作られた渡海船が和歌山県補陀洛山寺にあります。このような船で補陀洛渡海を考えたのでしよう。



復元された渡海船 和歌山県補陀洛山寺

霊場遺跡―足摺岬―

◆伊佐経塚

足摺岬は、足摺半島の先端にある太平洋に突き出た岬です。ここに、白い高さ約18.1mの足摺岬灯台があります。灯台が点灯されたのは、大正3年（1914）の4月1日のことです。

大正時代に造られた灯台は、昭和19年（1944）に太平洋戦争で米軍の機関銃の被害にあいました。その後老朽化が進み、昭和35年（1960）に現在のロケット型の灯台となりました。



足摺岬灯台
経塚が造営された地点

灯台の灯火までは、海面から約60mあります。光の届く距離は、20.5海里（約38km）とされています。

では、近代的な岬に灯台が設置される以前、灯明台のようなものは、付近になかったのでしょうか。1頁で紹介した『四國第三拾八番土佐國足摺山圖』を見ると、灯台から東の方にある現在の展望台あたりに、石垣の上に立つ灯明台が描かれています。この図から江

戸時代には、灯明台が設置されていたことがわかります。伝承では、昔から木造の四角い灯明台があり、海神に捧げられていたといわれています。

さて、大正3年のころ灯台の基礎工事中に高さ約23cmの青銅製の蓋のある筒が2つみつかりました。これは、書写した経典を納めた経筒（きょうとう）です。内面を観察すると底には、巻物の痕跡が残っています。この経筒は、石垣の中からみつかったといわれており、



経筒 東京国立博物館蔵
E-14704 image:TNM image Archives

経筒 東京国立博物館蔵
E-14704 image:TNM image Archives

経筒以外にも副納品（かぶのひん）が存在したと考えられますが、残念ながら記録が残っていません。このように経典を埋納した所を経塚（きょうづか）と呼んでいます。

この経塚は、発見場所が旧幡多郡清松村大字伊佐であったことから伊佐経

塚と呼ばれています。この経塚の造営された時期は、平安時代末から鎌倉時代と考えられています。

なお、この経筒は東京国立博物館に所蔵されています。大正4年の東京帝室博物館の『埋蔵物録』には、経筒は高知県から寄贈されたものと書かれています。高知県内で、岬の先端に造営された経塚はこの経塚のみで、観音信仰や熊野信仰を背景に成立したと考えられています。

◆岬の一字一石経塚

足摺岬の灯台に至る道の傍林の中に四角い石があります。ここは、ガイドさんも知らない場所でした。石の大きさは、基礎が一辺約46cm、高さ7cm、その上に台座があります。台座は正方形状をしており、一辺が約39〜38cm、高さ約44cmです。台石は上部が斜めに欠損しており、そこにセメントを使用して修理がなされています。そばには、円形状の石があり台石にもともと置かれていたものと思われます。その上にさらに石仏が置かれていたと考えられます。また、隣接して石垣があり、建物が存在していたと想定されます。

台座の正面中央には、「大乘妙典一石／一字」と刻されています。右側面には、「造立願主／瑞長」とありますが、表面の剥離が進んでいます。左側面には、「山住／法印瑞長」

願主／脇坊／龍識／祐長」と刻されています。背面には「七箇浦願主爲富貴／自／在」とあります。残年ながら造立年号は刻されていません。1頁の『四國第三拾八番土佐國足摺山圖』には、「経塚」とあり、台座上に置かれた石仏が描かれています。



一字一石経塚標識の台座



「経塚」○の部分
『四國第三拾八番土佐國足摺山圖』より

この経塚は、大乘妙典つまり法華經を一石に一字ずつ書写した石を埋納した一字一石経塚と考えられ、霊場を意識して、造立されたと思われます。

企画展「土佐人 山本忠興と近代オリンピック」展示予定資料から

会期：令和2年7月17日(金)～9月6日(日)

来年は約半世紀振りに東京でオリンピックが開催されます。予定より少し延期となりましたが、オリンピック開催の喜びや高揚感が変わるものではありません。街でもオリンピックムードが高まって来ています。

56年前の東京オリンピックは日本だけでなくアジアで初めて開催されたオリンピックでした。実は、それから遡ること24年前となる昭和15年(1940)に東京でのオリンピック夏季大会の開催が決定していたことをご存知でしょうか。そして、なんとその招致活動のなかに、高知県出身の電気工学者である山本忠興(写真1)が関わっていたのです。



写真1: 山本忠興写真
(早稲田大学大学史資料センター蔵)

彼は、大正6年(1917)から4半世紀にわたり早稲田大学競走部部长(監督)もつとめ、その教え子がオリンピックでメダルを獲得していました。

そこで、高知県の方にはあまり知られてない「土佐人 山本忠興」の功績を掘り起こす展覧会を企画しました。その内容を先取りして、この企画展の出品資料から、特に目玉資料である「友情のメダル」(写真2)についてご紹介いたします。このエピソードは小学校道徳の教科書(光文書院2018年度版など)にも収録されたことがあり、耳目にふれたことがある人もいるかもしれません。写真を一見してわかるように、このメダルは、左右の色が異なっています。



写真2: 友情のメダル
(早稲田大学大学史資料センター蔵)

これは、右側が銀メダル、左側が銅メダルで、両方を継ぎ合わせているためです。

昭和11年(1936)にドイツで開催されたベルリンオリンピック棒高跳びの決勝に残った5人のなかに2人の日本人選手がいました。慶應義塾大学の大江季雄と早稲田大学出身の西田修平です。この西田が山本忠興の教え子の一人です。決勝後、両者は同じ4メートル25センチで、銀メダルと銅メダルに決定しました。本来なら、2・3位決定戦により順位を確定するところですが、5時間以上の熱闘の末、時刻が夜9時を回っていたこともあり、両者は相談のうえ、決定戦を行いませんでした。ところが、結果は西田が銀メダル、大江が銅メダルと発表されました。棒高跳びは失敗しても3回まで跳ぶことが許されていますが、西田が1

度で4メートル25センチをクリアをした一方で、大江は2回目でクリアしたという差から順位が決められたのです。しかし、このルールは次回の東京オリンピックから採用されるもので、従来のルールでは両者が2位となる規定でした。

この決定に疑問を抱いた西田は、自身は前回のロサンゼルス大会で銀メダルを獲得しており、次の東京大会で金メダルを獲得し、金・銀・銅全てのメダルをコレクションするからと、2位の表彰台に大江をあげて銀メダルを受け取り、自身は銅メダルを受け取りました。

その後、大江は西田が銀メダルを持つべきと考え、取り替えに行きました。そこで、西田は大江に対して、2つのメダルを割って半分ずつをつなぎ合わせて2つのメダルを作ってお互いに持つてもらうと提案しました。こうして、銀と銅の半分ずつをつなぎあわせたメダルが誕生し、いつしか「友情のメダル」と言われるようになりました。

今回の企画展ではそのうち西田修平が持つていた友情のメダルを公開します。さらに、西田がロサンゼルス大会で獲得した銀メダルも併せて展示します。本県出身の山本忠興や、オリンピックゆかりの資料をじっくりご覧ください。

(石畑)

昭和の思い出 アンケートから

当館では昨年の夏に企画展「昭和から平成へーくらしのうつりかわりー」を開催しました。会期中に県民の皆様から昭和の時代の思い出を「炊飯」「冷蔵庫のある前後」「衣類」「電話」「学校と学用品」「旅行とお土産」「一推しの物語」の7つのテーマで募集し、貴重な体験談をお寄せいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。一番多く寄せられたのが、炊飯に関するものでした。その中の1通です。

おおよそ60年前、昭和30年代、私は小学高学年・中学生の頃、山奥の田舎での生活でした。まだ家庭には当然炊飯器も羽釜もない時代で、囲炉裏で鍋をかけ、ごはんを炊いていました。みんなで夕飯を食べた後、白米とひえ米を入れた鍋を囲炉裏の自在鉤ひまにかけ薪で火をおこし、沸騰して水分が減ってくると、自在鉤で鍋を上下しながら火加減を調節し、飯を炊きました。オコゲができると、それがとても美味しく感じました。夕飯を済ましたばかりですが、炊きたてのご飯が美味しく、夜食を食べたものでした。そのご飯はあくる日まで冷や飯で食べ、夕食が終

わると次の日のご飯を炊きました。味噌汁、煮物、お茶など、かまどではなく、全て囲炉裏で煮炊きしていました。昭和39年、日本開催オリンピックをテレビで観戦しながら祖母の背中にお灸をすえ、沸騰するのを待ちました。次の年、中学校を卒業し、田舎を離れました。年に数回の帰省。

いつの年か、母がいじいじ（外の炊事場）にかまど（くど）を2カ所作っていました。

昔から家の中にあつたかまどは、年末に豆腐やこんにやくを作る時に使うだけでしたが、羽釜より大きい鍋でないと使用できず、壊されていました。新しいかまどは春に筍たけのこや蕨わらびを羽釜で湯がき、お茶の葉を炒つたり年末に餅米を蒸すなど年に数回だけ使っていました。

そして真新しい保温ジャーから炊飯器、炊飯保温ジャーへと変化しました。保温ジャーは柿の渋抜きにも使ったりと変化しつつ、現在ではかまど炊き炊飯ジャーとなっています。

【昭和24年生・女性 高知県旧土佐郡本川村越裏門えりま（現・吾川郡いの町）】

国産初の自動式電気釜（電気炊飯器）が発売されたのは、昭和30年のことです。越裏門地区などでは、それから9年後も囲炉裏が現役で使われています。

た。そのことを物語るかのように、企画展でご紹介した高知新聞社提供の写真の中に、昭和35年1月にいの町清水地区（旧吾北村）の農家で囲炉裏を囲んでテレビに見入る家族の姿を捉えたものがありました。

自在鉤に鉄瓶をかけて、囲炉裏の上には、電灯がついています。囲炉裏の側には飯櫃でしょうか？ 桶のような木製容器も見えます。



旧吾川郡吾北村（現いの町）清水地区の農家の様子（昭和35年1月14日付『高知新聞』夕刊より）

従来の生活の中に電気製品が入ってきた様子を示しています。

もうひとつ気になるのは羽釜が無くて鍋でご飯を炊いていた点です。高知県内でも地域差があったようです。

また、昭和39年に電気炊飯器を購入された方（昭和14年生）は、それまでの間借り生活では石油コンロに雪平鍋（土鍋）でご飯を炊いていたそうです。

炊きははじめから、出来上がるまで火の加減を見ながらずーっとつきつきり炊いていたそうです。

昭和35年に炊飯器を嫁入り道具に新生活を始めた方は、六畳一間の住まいで、夜寝る時、枕元に置いて、朝スイッチを入れてからもう一度ひと眠りできるのが嬉しかったそうです。

土佐料理の研究で知られる高知県立大学名誉教授の松崎淳子先生からも、冷蔵庫の無かった時代には、酢を多用して、食材の防腐・保存をはかっていたとのお便りを頂きました。

時代による変化とともに、地域や家庭の規模によっても、道具と暮らしの関係や思いは多種多様なんだと、あらためて認識することができました。

現在もわたしたちのくらしの変化は続いていて、10年前を振り返ってみても身の回りだけでもその変化に驚くばかりです。これからのくらしの変化を捉えてゆくために、博物館としてその情報や資料をどう後世に伝えていくのか、生活者でもあり博物館学芸員でもある私たちは、悩みつつもその姿勢を問われているように思います。

昭和の思い出はまだ募集、あなたもぜひお便りをお寄せください。

（生年月日、場所、ご確認のための住所お電話番号などお知らせください）
（梅野・曾我）

れきみんのお正月

1月2日(木)・3日(金)



龍吟鳳舞
元親の和歌を観客と一緒に吟詠



龍吟鳳舞 凜々しい舞で魅せる



土佐硯 書きぞめコーナー



ちらし



土佐和紙でポチ袋



展示室でねずみさがし

令和初の「れきみんのお正月」は、おみくじやコマまわしなどの新春らしいメニューと、ふたつのスペシャルプログラムをご用意して皆様をお迎えしました。ひとつは「実演販売 土佐硯」で、硯職人の技をご覧いただき、土佐硯と土佐和紙の書きぞめを楽しんでいただきました。

もうひとつは、「チーム・龍吟鳳舞 吟詠と剣詩の共演」。秀鳳流日本吟詠会を中心とする龍吟鳳舞が、戦国時代

をテーマとした吟詠と舞で満場の観客を沸かせました。長宗我部元親が天正16年(1588)に聚楽第で詠んだ和歌も吟じられ、大いに盛り上がりました。

「松ぼっくりでハリネズミ！」などのワークシヨップや、抹茶とぜんざいのふるまいも大人気。「年始はすごい催しがあつて楽しい。また来たい」、「干支の展示は、トークを聞くと人形に息を吹き込まれ、いきいきして見えた」、「遠流de歴ピンがおもしろく勉強になった」などのご感想が寄せられ、2日間でおよそ千人の皆様にご来館いただきました。(中村)



土佐のまほろばウォーク
「れきみん」とまほろばクエスト

	開催日	コース
春	① 4月25日(土)	ここにもある！ 岡豊の古墳を探索せよ！
	② 5月28日(木)	長宗我部家と明智家重臣の 関係を探せよ！(1)
秋・冬	③ 9月19日(土)	岡豊城跡を制覇せよ！ +山城談議
	④ 10月25日(日)	長宗我部家と明智家重臣の 関係を探せよ！(2)+麒麟談議
	⑤ 11月27日(金)	土佐神社の石碑の謎を 探索せよ！
	⑥ 12月19日(土)	岡豊城下を探索せよ！ +山城談議
	⑦ 令和3年 1月27日(水)	国分寺でお宝を目撃せよ！
	⑧ 2月21日(日)	長宗我部家臣の所在を 探索せよ！+山城談議



休館前も休館中も、歴民から探索(クエスト)ウォークに出発です！
実施回数は去年より倍増の8回。長宗我部氏と明智家重臣の関係を探索する「旬な」コースもあります。今回は特別に、ウォークのあと山村民家で昼食を取りながら「ちつくと休んで、山城(麒麟)談議でもしていくかよ」(③④⑥⑧)もガイドさんの希望で企画しました。ぜひお楽しみください。



「龍馬パスポート」、「健康パスポート」の対象イベントです

※①②は好評につき受付終了。
③～⑧は7月2日～申込できます。
各回参加費500円(③④⑥⑧希望者のみ別途昼食代)

第11回 岡豊山さくらまつり

4月4日(土)・5日(日)

土佐の食1グランプリも同時開催!

中止

れきみんの日(開館記念日)

5月3日(日・祝)は**入館無料!**

※本年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今回は特別公開のみを行います。

第11回 長宗我部フェス

5月16日(土) 10:00～16:00

迫力満点の鉄砲隊演武や山城講座、戦国グルメ?ズイキ汁もあります。

中止

お知らせ

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、今後、表記以外のプログラム等についても、やむを得ず中止または変更させていただきますので、ご了承ください。

学校教育活動
支援事業



学校等が教育活動の一環として館での活動を計画し、バス等を借り上げて来館する場合に要するバス等借り上げ経費の一定額を負担します(希望校多数の場合は選考)。社会科や総合的な学習の時間等のほか学校行事など、各校の教育課程に応じて体験学習プログラムなどにもご利用ください。詳しくは、当館HPをご覧ください。か、お電話(088-862-2211)等でご連絡ください。

臨時休館のお知らせ

令和2年7月1日(水)

館内清掃作業のため休館します。

(予告) 長期休館のお知らせ

令和2年9月7日～令和3年2月末(予定)

耐震工事のため休館となります。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第109号
令和2年3月31日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888-8662-2211
FAX 0888-8662-2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 (通常展)大人(18才以上)470円
団体(20名以上)370円
(企画展)大人(18才以上)560円
通常展700円・団体20名以上560円
(企画展)土佐人 山本忠興と近代オ
リンピック)通常展520円・団体20
名以上420円
無料:高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神
障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被
爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)
印刷:川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール:rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 補陀洛東門開く 蹉跎山金剛福寺

令和2年4月27日(月)～6月28日(日) 会期中無休

土佐清水市足摺岬の金剛福寺は、四国八十八ヶ所霊場第三十八番札所で、観音信仰の霊地としても知られています。企画展では、近年の解体修理を終えた二十八部衆立像や本尊両脇侍の木造不動明王・木造毘沙門天立像を修理後はじめて一般公開します。あわせて、足摺岬から発見された青銅製経筒(東京国立博物館蔵)や至徳2年(1385)銘の鰐口、補陀洛東門の扁額などを紹介し、補陀洛信仰についても考え、当時の人々の祈りの世界に迫ります。(※開展日変更)



二十八部衆立像

企画展関連催し

●講演会

1「蹉跎山金剛福寺」4月26日(日) 14:00～16:00

講師:金剛福寺住職 長崎勝教氏

2「二十八部衆の起源」5月9日(土) 14:00～16:00

講師:(公財)中村元東方研究所専任研究員 田中公明氏

●講座

1「仏教考古学講座 お経のタイムカプセル-経塚-」

6月6日(土) 14:00～15:30

講師:当館副館長 岡本桂典

2「仏教考古学講座 お経のタイムカプセル-土佐の経塚-」

6月20日(土) 14:00～15:30

講師:当館副館長 岡本桂典

●ワクワクワーク「仏像の切り絵体験」5月4日(月・祝)

10:00～12:00,14:00～16:00(2回実施)

講師:当館職員 要申込、定員各10名

●ミュージアムトーク(担当者による展示解説)

6月14日(日) 14:00～14:30

※企画展関連催しは、全て要観覧券。講演会・講座は要申込(電話・メール・FAX) 先着各130名。

※5月5日(火・祝) 24日(日)は中止になりました。

中止

中止

企画展 土佐人 山本忠興と近代オリンピック

次回 令和2年7月17日(金)～9月6日(日)

高知県南国市出身の山本忠興は、1940年の東京オリンピックの招致活動に関わった人物で、早稲田大学競走部監督として多くのオリンピックを育成しました。本展では、彼の知られざる功績を掘り起こすとともに、日本における近代オリンピックの歴史をひもときます。



山本忠興写真
早稲田大学大学史資料センター所蔵